

聾史会報

28

目次

- 巻頭言／土地の歴史を想う
- 第13回日本聾史学会滋賀大会開催要項(案)
- 2010聾史セミナー開催のご案内
- 全国各聾史研究団体の便り
- 富山聾史研究グループ／第4弾講演会
- 信濃聾史研究グループ／耳取城跡(長野県小諸市)
- 札幌聾史研究会／自分史運動の新聞記事
- 愛知県聴覚障害者協会／裾野・箱根探訪旅行
- 会員投稿
- 古河太郎のこと
- 奥元帥の聴覚障害についての補足／ベル京都講演の
通訳者・安部磯雄／自費出版「建王論」
- 切手で語るろう教育略史2ハイニッケ・ザムエル
- 先行上映・映画「獄(ひとや)に咲く花」を観て
- 聾学校『モニュメント』めぐり 茨城県立水戸聾学校
- 民話／つんば歯痛・唾の小僧 ひと／つんばの金次郎
こと昇龍齋光玉 もの／つんばの妙薬チラシ
- 映画紹介 獄(ひとや)に咲く花
- 書籍紹介 高橋潔と大阪市立聾哑学校／よくわかる坂
の上の雲／目覚めるとき昭和／ゼロからの日清日露戦
争入門／ライシャワーの昭和史／絶版・映画に生きた
古海卓二の追憶／障害児の栄光
- 新聞切り抜き 点字の父・石川倉次伝を自費出版
- 編集後記

春



卯月

2010年4月

巻頭言

土地の歴史を想う

NHK番組「ブラタモ」を毎回楽しみに見ている。タモリが至る所の街にスポットを定めて散策する。江戸・明治時代などの古地図を頼りに現代の街並みから歴史の痕跡を発見し、その街の風景・古代・歴史などのエピソードを探っている様子が大変勉強になり、楽しい。

それに関して、あるサイトで高校時代の教師の著書が偶然、目に留まった。それは千葉県市川市国府台の母校が文教地区に入っているが、かつては旧陸軍の広大な駐屯地であり、そのことについてが詳しく書かれていた。私が在学の時、校地の隅に弾薬を掘り当てたり、先輩から兵士の亡霊をよく聞かされた。また、卒業後は会社で年配の方から「国府台から向こう東京の夜空にB29をめぐらして高射砲を撃った」と話を聞いたことがある。

先生の著書はさらに詳しく拡げて、母校近く県道の坂は、囚人を使って切り開いたので「旅団坂」という名前であることを初めて知った。市川市はこのような陸軍があったために、軍都として栄えた。江戸川沿いに多くの料亭や割烹が建ち並び、軍人を相手に繁盛したそうだ。当時の地図や元兵士の証言が多く語られており、一層内容を深めることができよかった。

先生は、教職の傍ら取材を地道に続けて来たそうで、退官後、多くの郷土関係の本を出したり、郷土史研究会の活動をしたりしているので、日本聾史学会の私たちと何かしら縁を感じて、うれしくなった。

どの土地にも歴史が築かれて埋まっている。私たちは土地に生まれ育ち、そして生活している。その歴史の鼓動を感じてほしい。

日本聾史学会 出版局長 中根 清隆

第13回滋賀大会開催要項(案)

第13回日本聾史学会滋賀大会の開催要項(案)です。会場・プログラム等変更の場合がありますが、正式の案内は7月発行の次回会報と同封します。皆様のご参加をお待ちします。

第13回日本聾史学会 滋賀大会開催要項(案)

- 1 目的 聾歴史全般に関する研究およびその普及を図ることを目的として開催する。
- 2 主催 日本聾史学会運営委員会
- 3 主管 第13回日本聾史学会滋賀大会実行委員会
- 4 後援 財団法人全日本ろうあ連盟、全国手話通訳問題研究会、
近畿ろうあ連盟、近畿手話通訳問題研究会、
社団法人滋賀県ろうあ協会、滋賀県手話通訳問題研究会、
滋賀県手話サークル連絡協議会、滋賀県立聾話学校同窓会(予定)
- 5 開催日 平成22年11月27日～28日(土・日)の2日間
(26日は運営委員会)
- 6 会場 滋賀県立男女共同参画センター(近江八幡市)(予定)
- 7 プログラム
第1日目(11月27日)
 - 12:30 受付
 - 13:00 開会式 歓迎のあいさつ 他
 - 13:30 基調講演「西川吉之助の生涯と交友関係」(仮称)
 - 15:20 休憩
 - 15:40 「西川吉之助・はま子」トークショー
 - 17:00 夕食
 - 18:00～20:30
研究レポート発表
募集したレポートを選考でパスした者、1人につき15分間パワーポイントによる発表し、その後討論5分間を行う。
第2日目(11月28日)
 - 9:00 受付
 - 9:30 学習会 テーマ「未定」
 - 11:00～11:30
全体会
閉会式 次回大会開催地へのバトンタッチ
 - 13:00～16:00
西川吉之助ゆかりの地探訪ツアー(希望制:25名×2組限定)
引率 解説者 辻 久孝
- 8 参加費 日本聾史学会員 6000円(学生5000円)(夕食付)
一般参加者 7000円(学生6000円)(夕食付)
歴史探訪ツアー 2000円(参加者25名×2組 限定)(昼食付)
- 9 参加申し込み方法
実行委員会事務局へ往復ハガキにて必要事項を記入の上、申し込む形式とする。
- 10 大会実行委員会事務局
社団法人滋賀県ろうあ協会 気付
FAX 077-564-4157

2010聾史セミナー 開催のご案内

7月24日(土)・25日(日)

■会場
京都/コミュニティ嵯峨野
(全国手話研修センター)

日本聾史学会は京都の名勝地・嵯峨嵐山で聾史セミナーを2日間開催します。6年ぶりの開催ですが、大会とは一味違う趣きの企画です。一泊夕食交流会あり、周辺散策よし、みんなで楽しく学び合い、交流してみませんか。多くのご参加をお待ちします。

●7月24日(土) 講演
「わたしは何のためにろう史を
学ぶのか」～基礎知識をふまえて～
鈴村 博司 氏(岐阜県立岐阜聾学校教諭)

聾学校の劇場型授業で定評のある鈴村博司教諭。聾史を学ぼうとする一般参加者を考え、基本的な知識とあわせて、告白風の内容を話してみたい。

●7月25日(日)
パネルディスカッション

鈴村 博司 氏(岐阜県立岐阜聾学校教諭)
桜井 強 氏(日本聾史学会会長)
中根 伸一 氏(日本聾史学会副会長)

講演をふまえて、聾史について自由に意見を交わし合ってみる。その知られざる面も浮かぶかも。

●主催/日本聾史学会

参加対象者/
聾歴史に興味を持つ方どなたでも
参加できます。



授業風景の鈴村博司氏

■参加費

- Aコース 2日間 1泊3食付(ツイン)
会員12,000円(非会員13,000円)
シングル希望の場合1,000円プラス
- Bコース 2日間 宿泊・夕食なし
会員3,000円(非会員3,500円)
- Cコース 24・25日のいずれか
会員1,500円(非会員2,000円)
- 24日夕食交流会(日帰りの方のみ)
4,000円(会員/非会員とも)

参加定員50名 申し込み先着順〆切

※宿泊はコミュニティ嵯峨野。ツインは相部屋になります。夕食に飲み物がつきます。※参加賞オリジナルグッズがあります。※会員とは日本聾史学会の会員です。

※申し込み方法は4ページへ

■スケジュール(予定)

7月24日(土)

- 13:30～ 受付
- 14:00～ 開会式
講演
各研究グループ活動、情報交換等
- 18:00～ 自由行動
- 19:00～ 夕食交流会 和室宴会場
- 20:30～ 自由時間

7月25日(日)

- 07:30～ 朝食 レストラン
自由行動
- 08:30～ 受付
- 09:00～ パネルディスカッション
- 11:30～ 閉会式 全員記念写真
- 12:00～ 昼食 スタジオ 以後自由解散
京都市内観光をお楽しみください



●講師/鈴木博司氏プロフィール

- 1978年 愛知県立名古屋聾学校高等部卒業
- 1985年 日本福祉大学大学院社会福祉研究科修士課程修了
- 1985～1998年 社団法人岐阜県聴覚障害者協会専従
- 1991～2000年 日本福祉大学非常勤講師
- 1999～2000年 岐阜聾学校常勤講師
- 2001～2003年 和歌山県立和歌山ろう学校教諭
- 2004年～現在 岐阜県立岐阜聾学校教諭(地歴公民専修免許)



コミュニティ嵯峨野



嵐山・渡月橋

●会場地図



※1階ロビーのろう関係書籍コーナーに日本聾史学会の各大会報告書があり、お買い求めできます。

●交通機関

- コミュニティ嵯峨野(全国手話研修センター)
〒616-8372 京都市右京区嵯峨天龍寺広道町3-4
【宿泊・会議・宴会】TEL 075-871-9711
FAX 075-871-9713
- JR嵯峨野線(山陰本線)嵯峨嵐山駅下車すぐ横
JR京都駅乗り換え32・33番ホーム
- 京福電鉄嵐山線 嵐電嵯峨駅下車 徒歩3分

■申し込み

- ①氏名(性別) 会員(有/無)
- ②住所(〒)
- ③FAX番号/Eメールアドレス
- ④参加コース
 - Aコース 2日間 1泊3食付
会員12,000円/非会員13,000円
ツイン・シングル(+1,000円)希望を明記
 - Bコース 2日間 宿泊・夕食なし
会員3,000円/非会員3,500円
 - Cコース 7月24・25日のいずれか
会員1,500円/非会員2,000円
 - 24日夕食交流会(日帰りの方のみ) 4,000円
- ⑤申込締切日: 2010年6月24日(木) 先着順
- ⑥申し込み・問い合わせ先: 長尾企画部付
Fax: 0574-75-2712
Eメール: kewpienm25@hotmail.com
〒509-1106 岐阜県加茂郡白川町坂ノ東6329-1



- ⑦参加費は郵便局にてお振り込みください
口座番号 00580-3-80651
加入者名 日本聾史学会
<他金融機関からの振込用口座番号>
銀行名 ゆうちょ銀行
店名 ○五九店(ゼロゴキユウ店)
預金種目 当座
口座番号 0080651
受取人名 ニホンロウシガツカイ
- ※FAXかEメールに①～④を記入して送信。振込用紙裏の「通信欄」にコース名をご記入ください。
- ※振込後のキャンセルは払い戻しできない場合がありますので、ご注意ください。
- ※会報「2010聾史セミナー開催のご案内」(3・4P)が案内チラシになりますので、切り抜くかコピーしてご持参ください。「日本聾史学会」のホームページからもダウンロードできます。



全国各聾史研究団体の便り

■富山聾史研究グループ第4弾講演会 「聾米」の作品がいっぱいあると 驚いた!『加賀の青木木米と聾米の作品』

去年10月25日(日)午前10時から富山聾史研究グループ企画として講演会を開催しました。日本聾史学会元運営委員の美多哲夫氏を招いて「青木木米の歴史」という立派な講演でした。木米は、熱い窯の壁に自らの耳を近づけて、炎の音を聞き分け、あわせて炎の色を目で確認していた。しかし、この独自の判断法が後年難聴の障害をもたらすことになった。春日山窯のきっかけで陶業

を始めたことから「花瓶」など多数の作品が出来たという話でした。

美多講師は、この作品の写真を収集するのに苦労したという話も出たけど、多数の写真をスクリーンに映し出し、「凄く綺麗な茶碗!買えないぐらい高価」「青木の手で作った物が出来たか信じられない」と驚きました。今度も聾啞者のアンデューティティを明確するためには、改めて聾啞者の偉人の歴史をもっと学んで広げたいと思います。

「聾米」に興味がありましたら、詳しくは富山聾史グループの益塚事務局長までにお問い合わせ下さい。



司会を務める益塚事務局長



熱演する美多講師

■信濃聾史研究グループ 耳取城跡(長野県小諸市)

相澤英人氏から「妻の故郷(長野県小諸市)で、耳取城跡の石碑や耳取の案内板などを発見した!」と写真が届いた。

インターネットで「耳取城」について調べたところ、戦国時代にお城が建ててあったが、戦いのため廃城となった歴史があるそうである。

小諸市の耳取地区に、「耳取城跡」の石碑(昭和61年3月建立・耳取区史跡保存会一同)が建っている。そして「耳取公民館」「耳取バス停留所」「耳取の道路案内標識」などもあり、面白い名前の“耳取”だと思ふ。

《参考資料》インターネットほか

(資料・写真提供:内田博幸・相澤英人)



「史跡・耳取城跡の記念碑」



県道78号線の「耳取、道路案内標識」



札幌聾史研究会 自分史運動の新聞記事

聾史研究する上で、ろう者偉人伝を中心に調査する今の学会の方向性に私は疑問を持っています。本来の掘り起こし運動は記事の通り、本物でなければならないと思っています。史料からの掘り起こしでなく、聞き取りからの掘り起こしの大切さを忘れられていませんか？

北海道新聞

2010年(平成22年)2月27日(土曜日)

札幌圏 30

4月から作業を行う11冊目の自分史づくりについて話し合う川式子さん(左から3人目)ら札幌研ふれあい班のメンバー



札幌手話通訳問題研究会 取り組み10年

よ わいを重ねたろうあ者の人生を手話で聞き取り、一冊にまとめる自分史づくりは、札幌手話通訳問題研究会(札幌研、135人)が取り組んでいる。1年に1冊のペースで、これまでに10

人が完成。障害のために、家族や友に自分自身のこれまでの歩みや考えを伝えることが難しい高齢ろうあ者にとって、世界に1冊のかけがえのない贈り物になっている。(長谷川唯)

高齢ろうあ者に自分史を

札幌研は手話通訳の労働環境改善などに関心を持つ健常者をつくるボランティア団体。ろうあ者との交流を往々にしてきたふれあい班が「自分史」活動に取り組み始めたのは1999年。15人の班員が手分けして、60、70代の女性6人、男性4人に取材をした。

聞き取りの対象となる高齢者は、幼いころろうあ学校が近くになかったなどで、手話では話せるものの文字の読み書きに困難を感じている場合が多い。漢字が読めない高齢者もいるため、すべての漢字にルビを振る。

長谷川マリさんの長男金一さん(55)は、4年前に完成した母の自分史を読んで心を打たれた。耳の聞こえない母が、子育てをする上での苦労が書かれていたから。

自分が生まれたばかりのころ、母は夜泣きをしたら分かるよう、腕に自分の頭を乗せて寝てくれた。家事の時は知らない間に階段から落ちないよう、柱にひもを付けてその先を自分と結んでいた。

「昔の話は聞いていたが、詳しく教え

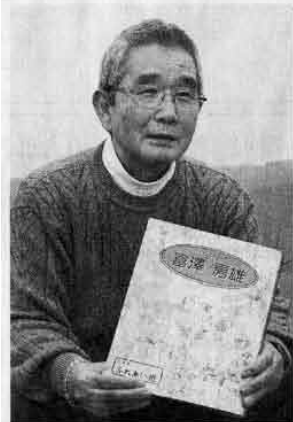
班員15人が取材

「私は昭和9年6月2日に青森県三戸郡向村(現在の南郷町)で生まれました」

長谷川マリさん(75)は札幌市東区IIの自分史は、こんな一文で始まる。

1歳の時、病気で耳が聞こえなくなつたこと、「おし」といじめられ小学校を1カ月でやめてしまったこと、ろうあ者体育大会での活躍などが、B5判のルーブリック77ページにつづられている。マリさんは「ふだんは大切なものを置く棚に保管している」と大事そうになる。

かけがえのない一冊「貴重な体験」



昨年完成 札幌の富沢さん

自分史づくりのボランティア活動を特別な思いで見守るのが、札幌市厚別区の富沢房雄さん(72)。昨年完成した10冊目の自分史には、長年ろうあ者の地位向上に尽力してきた富沢さんの活動の歩みが記されている。

富沢さんは日高管内静内町(現・新ひだか町)の生まれ。室蘭のろう学校を卒業し、札幌の鉄工所で働きながら札幌聴覚障害者協会豊平区支部長に就いた。

富沢さんが行政や企業への働きかけに力を入れたのは、自分が直接、通訳の制度は多い。重度心身障害者が市内の交通機関で使える無料パスの導入、市内各区へのろうあ者相談員の設置、区役所などへの公衆ファックスの設置だ。

鉄工所での仕事と要望活動の両立にも苦労が絶えず、「市が日程を決めるので合わせなくてはならず、困ってしまいました。『腹が痛い』と会社を休んで市役所に行く。クビにならないかと不安に思っていました」と一生懸命に頑張るろうあ者の一節につづった。

富沢さんは「自分史は、ろうあ者の歩みを知ってもらうこともつながる。聴覚障害者の地位向上の活動が今後も活性化していけば」と訴える。

「地位向上への一助に」

完成1年がかり

取材は困難の連続だ。手話で話す高齢者は抽象的な表現をあまり使わないため、できるだけ具体的に質問する必要がある。「お父さんはどんな人でしたか?」ではなく、「お父さんは厳しい人だった? 優しい人だった?」となる。

高齢者独特の手話表現もある。「明日」という言葉は、人さし指を立てるのが一般的だが、高齢者にはその指を曲げる人もいる。その場合、「カメラ」を意味するため、文脈で判断するか、聞き直すしかない。

インターネットやメールを駆使する高齢者も少なくない。

年齢は少ないため、取材の日時を相談するときはファックスを使う。手話だけでは相手の言いにくいことを理解できず、絵を描いてもらったりと意味が分かることも多い。取材には時間がかかり、例年春に始めた作業が終わって自分史が完成をみるのは12月ごろだ。

自分史は本人用、札幌研用、ふれあい班での保管用と、同じものを3冊作成する。札幌研の入る札幌市視聴覚障がい者情報センター(中央区大通西19)では閲覧も可能だ。

ふれあい班に所属し、当初から自分史づくりにかかわってきた西川式子さん(58)は言う。「自分史を作ることは、手話を学ぶ私たちにとっても貴重な経験。一冊でも多くの自分史を作りたい」

■愛知聾史倶楽部 裾野・箱根探訪旅行

10月31日より1泊2日、愛知聾史倶楽部は寺子屋聾師匠柳澤文溪関係史跡巡りの探訪旅行を行った。三島駅からレンタカーを借りて、まず柳澤文溪の肖像画や書籍などが保管されている深良地区郷土資料館へ向かった。裾野市深良支所と併設のため土・日曜日は休館だったが、それは承知の上で再訪問のため、とりあえず場所を覚えた。

次は柳澤文溪の墓近くにある耳石を訪ねる。石の凹みに突っ込んで、耳に当てると治ると言い伝えがある。しかし、この耳石は富士山からの噴火石で、凹みは空気吹き出しの穴である。ずいぶんと離れている所に、噴火石があちこち転がっていたので富士山畏るべし、ゾッと感じた。

次は柳澤文溪の墓にたどり着いて、みんなで記念写真した。柳澤文溪については昨年末、福岡大会の研究レポート発表でおわかりかと思う。

泊まりの箱根芦ノ湖へ向けて、御殿場プレミアムアウトレットを立ち寄る。道中に銀嶺の富士山がどこまでもついていた。

間近に見える金時山は、金太郎でおなじみの足柄山のことである。仙石原のススキはちょうど観光シーズンで人がいっぱいにぎわっていた。

箱根といえば高級リゾートのイメージだが、芦ノ湖畔に泊まりのキャンプ場があるとは知らなかった。コテージは床暖房で水洗トイレ、すぐ近くに露天風呂があつて良かった。さすがはプリンスホテルの敷地内だが、泊まりは2食付で安かった。

翌日の朝は霧にかかったが、大湧谷と箱根関所を巡った。再び三島市に戻り、柿田川を散策した。富士山からの湧き水はエメラルド色で美しかった。



神社境内にある耳石



柳澤文溪の墓



仙石原のススキ



柿田川の湧き水



深良地区郷土資料館

会員投稿



謹賀新年。

今回は日本で初めての公立聾学校、京都盲啞院の創立のあたりを書く。先々回の<18>(11月号掲載)に「山尾庸三が政府に出した盲啞学校創立の建白書が却下され、それを読んだ榎村正直京都府知事が共鳴して、京都で古河太四郎を援助して、わが国初の公立の盲啞学校が誕生した」と書いて終わっているの、今回はその続きである。

明治11年の京都盲啞院の設立について、今までは、石井研堂著『明治事物起源～第七巻学術～』によって、次のように話してきた。

「…京都に古川太四郎といへる奇特人あり。維新のさい、法に触れて入牢す。入牢中日々獄窓前に遊べる両啞児あり。衆童のために罵詈凌辱せらる。古川これを見て惻隱の情に堪へず、出獄の後、これを教へて社会のためにつくさんと志し、出獄のとき同志者上京第十九区長熊谷伝兵衛と相謀り、明治八年の頃これを起こす。十一年五月、京都府これを拡張して公立となし、京都府盲啞院といふ。実に日本最初の盲啞院なり。…」

つまり、古川が投獄された時、獄窓から見たら、ろう児がいじめられているのを見て、何とかしてあげたいと思って、出獄後ろう教育を志したということである。

ところで、そこで素朴な疑問が出てきた。

●疑問1…正式な苗字は古河か古川か？

古河太四郎と書くべきか、それとも古川太四郎か？ 答えは、最初は古河家で生まれ育ち、明治11年京都盲啞院を創設するまで古河と名乗ったが、その後経営難で失職し明治33年に大阪盲啞院に関わった時から古川と名乗って、明治40年62歳没するまでその苗字で通した。

●疑問2…何の罪で投獄されたのか？

古河はその理由を公言しなかった。彼の友人、小西信八にも自分の過去を「国禁に触れて投獄されたが、後で大赦された」と話すのみ、具体的罪名は言わなかった。後に紹介する岡本稲丸氏の著作によると、勤皇志士として活躍していた時、水争いの解決のため奔走し、ため池の土木に関わったのを古河を嫌う有力者により詐欺を働いたとされ逮捕された「新池事件」、つまり政治的理由らしい。

●疑問3…本当に聾児を獄窓で見たのか？

該当するろう児は実在していた。山口いと、弟善四郎、山川為次郎の3名。ただし、獄窓で見たかどうかというと、これは古河自身の話ではなく、彼に関係した人の話が元

古河太四郎のこと

(鈴木博司・岐阜県)

ろうあ岐阜<一寸コラム>より引用

で広まったが、その真偽はまだわかっていない。

●疑問4…盲啞院開学の時、何人の生徒がいたのか？

盲啞院開学当時は、盲児童17人、聾児童31人の合計48名。つまり聾児童の方が多かった。盲啞院の前身、待賢小学校の時、明治6年はじめて古河が手がけたのは聾児童3名で、その後、明治10年、盲児童の半井緑1名を加えた。つまり、教育の機会は聾児が先で、盲児が後だった。

●疑問5…京都盲啞院の開学の様子はどうかだったのか？

明治11年5月24日、京都盲啞院開学の様子を大阪日報が次のように記している。(現代文風に表現を変えた)

古河が板書「動物の中で、どうして人が一番尊いか？」生徒の善四郎が手勢(手話)で、「人は精神や感覚が動物よりも卓越しているからです」

古河板書、「人の智慧はどうしたら増やせるか？」生徒の善四郎、「学問です」、生徒の為次郎、「言語をもたなくても教育を受ければ智力が発達します」

さらに古河は「発音」と板書して、それから「祝」を書くと生徒善四郎はそこへ「いわう」と書き込み、それから「イーワーウー」と声を出した。生徒為次郎も別の読み方「いわい」を書き、「イーワーイー」と発音した。この様子を見た榎村知事は感動のあまり手ぬぐいで顔を覆った。

●情報源について

簡単に情報源を紹介する。古河太四郎研究の第一人者は京都聾学校元教諭の岡本稲丸氏。30年にわたる研究の集大成が『近代盲聾教育の成立と発展～古河太四郎の生涯から～』NHK出版。もうひとつは、翌年に刊行した古河太四郎の血縁者、古川統一氏による『累代の人々～盲聾教育の祖・古河太四郎亮泰の系譜～』。その内容は、古河家の歴史と、その一員である彼の教育法の思想や根源の「東洋的教育観」を論述している。



古河33歳にて創始の聾教育は今年で133年目。私たちににとっては、知識と世界と自我に目覚めて今年はまだ133年目か。

奥元帥の聴覚障害についての補足

(松延 秀一・京都府)

日本聾史学会の福岡大会では偶然にも、福岡県出身の元帥・奥保鞏（おく・やすかた）についての発表が松延のも含めて二件あった。時期的にも、NHKが「坂の上の雲」の放映を始めており、これは偶然にしてもできすぎであり、話題になってもおかしくなかった。

もう一つの発表は、伊藤文久氏によるものであり、氏は奥を知るための根本史料の『奥元帥伝』、とくにその巻末にある関係者の回想・証言を綿密に読み込むことで、奥の失聴時期を特定しようとされた。松延のは、『奥元帥伝』にとどまらず（この伝記は残存部数が極少で、ほとんどの図書館には所蔵がない）、奥司令官の副官であった石光真清の『望郷の歌』（こちらのほうは、中公文庫にあって入手しやすい）なども参照し、結果としては、伊藤氏の発表を側面から補強した形である。どちらも結論はおなじであり、奥は日露戦争中は健聴だったのであって、彼が聴力を失ったのは、戦争後、時期としては、参謀総長に就任していたときである、というものである。

そうすると、ではなぜ司馬遼太郎は、『坂の上の雲』で奥を聞こえない司令官にしたたのか、という疑問が出る。当方は、わからない、とするしかないが、伊藤氏は、推測として、司馬が『奥元帥伝』の回想録を読んで、筆談に深い印象を受けて人物設定の参考としたのでは…、とする。ありえる仮定ではある。ただ、『坂の上の雲』は日露戦争の後半期で筆を止めており、戦後の時期には及んでいない。小説の時期設定の都合で、奥の聴覚障害のことを書きたいのにこのままでは書けない、ということで、失聴時期を戦前にさかのぼらせて、あのような描写になったと推測するしかないだろう。ともかく、司馬の歴史小説は、いくら小説とはいえ、史実に反する描写が多いのであるが、そういうものが、なぜ多数の読者をひきつけるのか理解しがたい。

ところで、昨秋はNHKの放映にあわせた便乗出版が相次いだが、さすがに奥に聴覚障害があった、とするものは見当たらないようである。だが、全くない、というわけにもいかなかったようであ

るが、それらは多分に司馬のあの描写を鵜呑みにしたまでのことであろう。

ただ困ったことに、奥の伝記風小説が出版され、これがまた司馬以上に、司令部での筆談によるやり取りをでっち上げている。それは、秋山香乃『群雲に舞う鷹』（NHK出版、2009）である。NHKが出したとなると便乗か、と疑いたくなるがそうでもないらしい。たまたまその時期に当たったということのようである。この小説も司馬の悪影響の一つかも知れない。

話は変わるが、伊藤氏は、奥に関係する書簡を収集されている。どうやって入手されたか承知しないが、書簡の散逸を防ぐには、例えば、国立国会図書館憲政資料室のような場で保管されるべきものであろう。将来の決断、すなわち公的な保存機関への寄贈を期待するとともに、書簡を自ら解読、あるいは古文書の読める人に解読してもらって、それを本会報に掲載するなり、本学会の大会で発表されることを期待したい。

ベル京都講演の通訳者・安部磯雄(1865~1949)について

(松延 秀一・京都府)

アレクサンダー・グラハム・ベル(Bell, Alexander Graham, 1847~1922)は、前号で紹介したように、1898(明治31)年に来日し講演した。そのうち、東京での講演記録は伊沢修二の通訳で『啞子教育談』として公にされている。一方、京都の講演記録も存在し「ベル氏来院記」と題され、京都府立盲学校に所蔵されているが、こちらのほうは、活字にはなっていない。この記録については元京都聾学校教諭岡本稲丸氏が大著『近代盲聾教育の成立と発展』(NHK出版、1997)の中で「京盲文書」にあるとして、ベルの京都盲啞院訪問の様子を描写するために引用された。それ以外には、この記録を用いた研究というのは見当たらないようである。つまり、先の『啞子教育談』にしろ京都の記録にしろ、どちらもていねいな検討はなされていない、ということになる。はたして、ベルは日本で何を語ったのか、手話についての見方はどうだったのか、ろう教育史の専門家の再読・再検討が求められよう。

ところで本稿は、ベル講演の詳細な再検討をめ

ざすものではない。ここでは、京都の講演の通訳者が、当時同志社英学校教頭の安部磯雄であったことに注意を喚起しておきたい。高校教科書にも一度名前が出てくるあの安部である。その安部が通訳を担当したことは、岡本氏の著書に言及があるから、未知の新事実というわけではない。さりとて、周知の事実というわけでもない。ベル来院を報じた当時の京都日出新聞（1898.11.22）には安部の名は出ておらず、周知でないことは、数少ない安部の伝記、例えば片山哲『安部磯雄伝』（毎日新聞社、1958）や高野善一『安部磯雄：日本社会主義の父』（『安部磯雄』刊行会、1970）にはこのベル講演通訳について言及がないことに示される。では、同志社出身で通訳当時同志社の教員だったから、同志社の校史はどうか、と見れば、学外でのことだからなのか、見当たらない（『同志社百年史』同志社、1979）。そこで、安部の残した自伝『社会主義者となるまで』（改造社、1932）を見ることとしよう。

周知のように、安部は日本最初の社会主義政党である社会民主党の結成に関与し、その結党宣言を起草した。彼がなにゆえに社会主義に目覚めていったかを示したのが、前述の自伝である。ただ時期的には、日清戦争どきまでにとどまり、当然ベル講演の通訳について触れるところはない。しかしこの自伝のなかに、なぜ彼が通訳を依頼されるに至ったかの示唆を読み取ることができるように思われる。例えば、自伝の64ページには、私は廿二歳の頃から度々通訳を依頼されるようになった。然しこれは決して私に限られたことではない。私の同級生は殆んど全部同様であった。とあり、まずは、同志社出身ということでその英語力を見込まれたということは想像に難くない。だからベル講演通訳といっても、数多い通訳経験の一つにすぎなかった、と言えるであろう。しかしそれだけだろうか。明治初期の同志社人にとっては、新島襄とともに同志社の創設者となった盲目の山本覚馬との出会いも大きかったのではないか。自伝の71ページには山本について言及、盲目だったと明記している。さらに、102ページでは、明治17（1884）年9月での卒業演説会で安部は「宗教と経済」という題で演説したが、このあと山本が新島の代理で卒業証書を渡した、とい

う。安部ははじめ当時の卒業者にこの経験はどれだけ大きかったであろうか。

安部は卒業後、同志社の教員となったり、岡山教会へ赴任したりしたが、大きな転機となったのは、アメリカおよびドイツへの留学であった（1891～1894）。滞米中に社会主義者となった、というほどの経験であつたらしい。ここでは、アメリカでの留学先が、北東部のコネチカット州にあるハートフォード神学校であったことが重要であろう。神学校での学びもさることながら、社会事業についても見聞することとなった。その一つに盲啞院の存在があつた。自伝の177ページにこう書く。

盲啞院はコネチカット州のみでなく、他の諸州のためにも其門戸を開放していた。斯の如くハートホード市は宗教や社会事業の中心であつた。…ここでは、障害児教育を社会事業の一環として理解していたことがわかる。また、障害者との接触経験もあつた。安部が日露戦争後の1906年に出版した『理想の人』という修養書の中にこうある。ここでは、論創社版（『平民社百年コレクション』所収、2003）による。

余は米国に在りし時幾度か路上に於て片足を失へる人、片手のなき人、背虫、跛者などに出遇つた。…（p. 58-59）

余は嘗て米国の或盲啞学校に於て聾啞にして盲人なる一少年を見た。…（p. 177-178）
米国でこうした体験があつたことが、京都盲啞院から通訳を依頼される下地となつたのではあるまいか。

さて、ベル講演通訳経験が安部にもたらしたのはあつたのか。通訳依頼が多かつたとなれば、これも一つの経験たるにとどまるであろう。しかしながら、なにがしかの痕跡を見ることはできそうである。例えば、上述の『理想の人』からの引用部分は米国留学時代の体験の紹介であるが、こうした体験を書き残すところに見出せないか。障害者に対する認識はどうあるべきか、同じ著のなかでこう述べる。

不具といふことは不具者の罪でないといふことを知り、彼に対する最良の途は彼をして其不具者たることを忘れしむることに在ることを思はば、吾人は街上に於て若くは公会の席に於て不具者に注

目するが如き不体裁を避けねばならぬ。不具者は身体の上に大なる不便と苦痛とを有して居るのである。社会が聊かにてもこれを侮蔑するが如きことあらば更に精神的の苦悶を彼に与ふるのである。これを残酷と言はずして何と言おう。(p. 60)

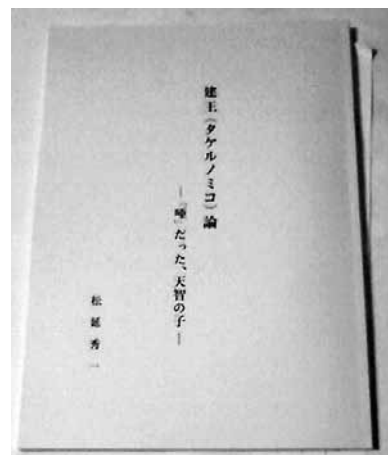
明治という時代にあって、この認識は傑出していたのではないか。

自費出版

「建王(タケルノミコ)論 —「啞」だった、天智の子—

松延秀一氏は、これまで学会大会の研究レポートや会報に載せたものをまとめて「建王(タケルノミコ)論 —「啞」だった、天智の子—」の本がこのほど自費出版されました。

限定百部 75ページ



切手で語るろう教育略史 2 ハイニッケ・ザムエル

(岡本正純・福岡県)

前回では、仏蘭西のフランスのアペ・ド・レペ「切手で語るろう教育略史1」を紹介したが、彼と論争した独逸のハイニッケ・ザムエル (Samuel-Heinicke Schule 1727年4月14日～1790年) について述べておこう。ろう教育における手話法のルーツは、前回に、紹介したフランスのド・レペに求められよう。これに対して、口話法のそれはドイツのハイニッケであろう。今回はこのハイニッケを描いた肖像切手(初日カバーは東ドイツ(当時)ろう教育二百年を記念にして発行された。ハイニッケ肖像画とろう児(指文字A, B, CとLが描かれている。Lは東ドイツろう教育の発祥地ライプチヒ(Leipzig)の頭文字から採っている。尚、押印はMansfeld郵便局である。左下に彼が創立した聾学校の図案が描かれている。発行日は1978.4.4、即ち、最初の聾学校が創立してから200年になる。スコットカタログ番号 東ドイツ #1902-1903)) である。ちなみに、聾学校の校長室にハイニッケの大きなレリーフが飾ってあったが、実践的には手話も指文字も教室で使ってい

たのである。

ところで、ハイニッケの経歴及び、彼のろう教育に入ったきっかけについて簡潔に述べておこう。ハイニッケは、ドイツのザクセン州の中流農家に1729年に生まれた。農業を嫌って家出をし、ザクセン侯の軍隊に入隊して楽団員楽士となり、軍務に服しながら語学、数学などを独学し、家庭教師をする中で、その生徒の一人であるろう少年に出会った。これがハイニッケのろう教育への動機となったとされているのである。更に、1760年デンマーク大使シンメルマン伯の家庭教師兼秘書となり、68年に伯の援助で、ハンプルグ近辺のエッペンドルフに学校長と教会合唱隊指揮の地位を得ることとなった。以来10年間にわたる一般



教育に当たる中で、再びろう少年に出会い、その少年の教育に成功したことがハイニッケをしてろう児教育への道を本格的に歩ませることとなった、と言われている。そして1778年にザクセン候に請願し、その援助によってライプチヒに聾啞学校を設立するに至った。

ハイニッケのろう児に対する教育方法は口話法によるものであり、先に述べたようにド・レペの手話法とは全く対照的であった。ハイニッケは手話の使用を排除して、あくまでも音声語・話し言葉を指導の原理としたものであった。彼と手話法のド・レペとの間の書簡による大論争はあまりにも有名である。なお、ペール・エリクソン 著「聾の人びとの歴史 The History of Deaf People」中野 善達、松藤 みどり翻訳 明石書店 本書の

付録にアベ・ド・レペとザムエル・ハイニッケの往復書簡が収録されている。p171-201ハイニッケの口話法は系譜的には、1830年—40年代にペスタロッチ思想のヒル（1805—1874）に大きな影響を及ぼし、彼によって原理的に大成されていくこととなった。ハイニッケが「ドイツ口話法の父」といわれる所以はそこにある。次回はド・レペとハイニッケの「往復書簡」について考察したい。
参考文献 上野益雄 聾教育問題史—歴史に学ぶ—図書センター

ペール・エリクソン『聾の人びとの歴史』明石書店
都築繁幸『聴覚障害教育コミュニケーション論争史』お茶の水書房
高山弘房『聾教育百年のあゆみ』聴覚障害者教育福祉協会

聾学校『モニュメント』めぐり 茨城県立水戸聾学校／森正隆先生の胸像

(内田 博幸・長野県)



森 正隆先生の胸像 (石)
(茨城県立水戸聾学校にて)

私立茨城盲啞学校を創立し、13年9ヶ月学校長として在職し、本県聾教育に大いなる貢献をされた。

現在、前庭にある石の胸像は、愛宕町盲学校の石像を原型に、昭和58年校舍改築竣工記念事業の一環として建立された。



森 正隆 (もり・まさたか) 先生
【私立茨城盲啞学校時代】
(明治41～大正元年)

1908 (明治41) 年2月11日、私立茨城盲啞学校創設 (現・三の丸小前) 創立者森正隆 (知事) が校長に就任し、弘道館にて開校式を行う。これが本県特殊教育における学校施設の初めである。

資料・写真提供：内田博幸 (長野県)、協力：菅沢美代子 (茨城県)

先行上映・映画 「獄(ひとや)に咲く花」を観て

(亀田明美・広島県)

2月23日付デフニュースで映画「獄(ひとや)に咲く花」の日本語字幕付き上映会のお知らせを見た時、行きたいと思っていたけれど、字幕付き上映は以下の2回のみでした。

2月27日(土)下関スカラ座シアターゼロと2月28日(日)ワーナー・マイカル・シネマズ防府でたった2回だけ。しかも場所は遠いし、上映時間も夕方5時からという条件が悪くて、すごく迷いました。

当日の朝、思い切って行くことに決意したものの、新幹線はもったいないから普通列車で行くことにしました。広島から防府まで約2時間半揺られながらの鈍行でした。

ちょっといい天気だったので、車窓から見える瀬戸内海や山々の景色が美しく、昼寝うとうと景色を楽しみました。思えば、忙しく生きている

のがばかばかしくなる位、ゆったり感を味わえる貴重な時間でした。

さて、この映画は、吉田松陰(劇中は寅次郎)の生涯一度の恋物語というテーマですが、私は吉田松陰の弟、ろう者の杉敏三郎が出るということに興味津々待ちました。短い場面だったが、ろう者の杉敏三郎がはっきり出て良かったと思いました。その上に、主役で堅物と思われた吉田松陰は、少年のような心を持った人物ではなかったかと改めて思い知りました。

映画全体が思いのほか内容も深く、吉田松陰と高須久のお互い愛情表現も清らかで、とても好感が持てた良い作品でした。

それだけでも、防府まで2時間半かけて行った甲斐がありました。帰りも普通列車でうとうとしながら乗りました。たまには普通列車でのんびりとした旅もいいねと思った一日でした。

この映画は、4月から全国順次公開予定ですが、ぜひ日本語字幕付きで上映してほしいと思います。

民話 啞の小僧

あるけちんぼおやじが十ばかりになる啞をつかっていた。啞だから耳も聞こえないので、身振りで教えてはたらかした。そのおやじは赤貝なんどが好きなので、娘がいろいろ考え、啞を納戸へつれていって、どうおしえるのか教えると、ちゃんと赤貝をかってきた。母親はそれを不思議に思い、どういう風にして赤貝をおしえるのだろうかとのぞいてみると、娘は自分の前をまくって、教えていた。

母親は娘の利口さに感心した。

その後、またおやじが赤貝をたべたいといいだしたが、あいにく娘が留守だったので、母親が啞を納戸へ連れていって前をまくって見せ、魚籠と銭を渡した。啞はうなずいて出ていった。

だが、日が暮れても帰らないので、どうしたのだろうと心配していると、十時ごろになってようやく帰ってきて、籠をさしだした。蓋をあけてみると、煉瓦色のうらのついた毛巾着がはいっていた。(資料提供/齋木昭孝・三重県)

ひと つんぼの金次郎こと 昇龍齋光玉

江戸後期から明治初年に江戸で活躍した印籠蒔絵師です。苗字すらない一職工ですが、幕末の蒔絵界に多大な影響を与えました。

通称が金次郎で、東海居・明堂居士・昇龍齋・一抱齋・光玉などと号しました。はじめ廣三なる印籠蒔絵師に就きましたが、よく出来た印籠を石に投げつけられたため、名工になろうと神に願をかけて修業しました。そのため耳が遠くなり、

蒔絵師の間では「つんぼの金次郎」・「ツン金」と呼ばれていました。

当時神田で育った蒔絵師で、ツン金と重傑(梶山明細)の息のかからぬ者はないとさえいわれ、仕事は梶山明細の先輩格でした。独身者で、維新後は起立工商会社に入り、岩崎交玉の指揮下で働きましたが、明治10年代に岩崎交玉宅で没しました。サイト「蒔絵博物館」より

<http://makie-museum.com/mkogyoku.html>

朝日新聞の連載小説「麗しき花実」(09年9月連載終了)に登場。

もの “つんぼの妙薬” チラシ

耳の遠い在宅の患者さんの92歳になられるおばあさんが、耳の遠い自分のことを『あたしゃ、つんぼだから。』とおっしゃっておいりましたが、久しぶりで“つんぼ”という言葉に耳にしました。

現代では障害を持つ人達に対する差別用語として“おし”や“めくら”とともに禁止される言葉ですが、ここにとりあげたチラシは明治期の初めと推測される和紙に版木で印刷をした京都丸太町堀川東入の葉村屋で製造していた“つんぼの妙薬”のチラシです。

変体がなで書かれているため読みにくいかと思われませんが、“なん病のつんぼを治す。耳なり(略)

など耳一切の病や産前産後、血の道、のぼせ一切、たちまち治る大妙薬。詳しくは能書きに記載してあります…”とあり病理学的にのぼせが亢じると“つんぼ”になり、のぼせを引き下げると“つんぼ”が治る、そのように効く薬のようで後日御紹介いたします“首から上の薬”や“健脳丸”に共通するものです。(縦24.5×横17cm)

いくおーる・おくすり博物館HPより引用



映画紹介



獄(ひとや)に咲く花

吉田松陰生誕180年。安政元年(1854年)長州、萩。「野山獄」にひとりの男が護送されてきた。生きて出られた者は誰一人いないこの牢獄に、希望を与え、その後の日本を切り拓いた男。彼の名は、吉田寅次郎。“幕末”は、この男からはじまった。

牢屋の吉田松陰と高須久の淡い恋がメインだが、吉田松陰の弟、杉敏三郎が少しだけ登場。しかも

その役がろう者(NHK手話キャスター江副悟史)。吉田松陰役が「長州ファイブ」で遠藤謹助を演じた前田倫良。高須久役は近衛はな。

芸能界に関わっている手話関係者が吉田松陰の映画化を聞きつけて、ろうの弟杉敏三郎を登場してほしいと要望して実現。2月山口・福岡県先行上映、4月より全国ロードショー。各地の字幕付上映日をご確認ください。



新刊紹介 「高橋潔と大阪市立聾哑学校」

手話を守り抜いた教育者たち

川渕依子著 発行：サンライズ出版

定価：2,400円+税 A5判 発行：2010年2月

手話通訳者として活躍した著者が、手話による心の教育を訴え続けた父、高橋潔と東北学院同窓生の同僚、後輩教育者たちの手話教育にかける凄まじい信念を、彼らが残した記録や証言をもとに採録して編著。高橋潔生誕120年、大阪市立聾哑学校創立100年記念として上梓。本年米寿を迎える著者が「父、高橋潔については書き尽くしたはずだったが、まだ本当に親孝行できたかどうか、本書はその確認でもある」と語る渾身の著作となった。

手話を守った教育者として知られる高橋潔は、山本おさむ著『わが指のオーケストラ』や、2009年2月には日本テレビ「未来創造堂」で手話の未来を切り開いた男として紹介されている。

しかし、本書では、同時期、高橋とともに手話を守った教育者の心情や、やがてその信念を受け継いだ人々の情念にまでも踏み込み、限られた資料の中から、心の教育に欠かせない手話の存亡をかけた、さまざまな葛藤を詳述している。



書籍紹介



人物でよくわかる「坂の上の雲」

奥保鞆は日露戦争の功績とプロフィールなど4ページわたって記載されています。作戦会議には筆談などコミュニケーション方法をとる。

2009年11月30日発行
出版社：日本の歴史を探り直す会編（書籍紹介 渡辺徳浩・大阪府）



「知識ゼロからの日清日露戦争入門」

1904年4月29日から5月10日、鴨緑江会戦の項目に奥保鞆の軍役職について記載されています。明治政府や日清戦争や日露戦争とは何だったのか詳しく記載されていますので読んでください。

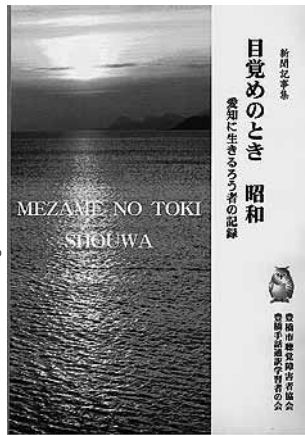
戸高一成著 江川達也画
出版社：幻冬舎



09年10月25日発行（書籍紹介 渡辺徳浩・大阪府）

新聞記事集「目覚めのとき昭和」

3,000円 09年11月発行
豊橋ろう協と手話サークルが収集家浅倉由男氏から愛知を中心したろう関係の新聞記事（昭和23年～62年）を集めたもの。発行先：豊橋市聴覚障害者協会（書籍紹介 中根清隆・愛知県）



「ライシャワーの昭和史」

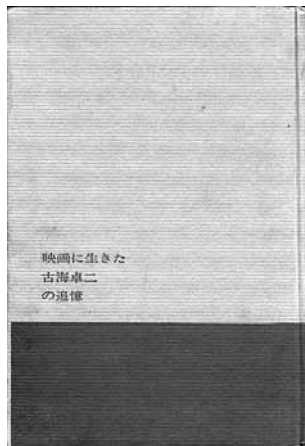
ジョージ・R・パッカード／森山尚美訳
出版社：講談社 定価：2,600円＋税。

宣教師として来日したライシャワー家3人兄弟の妹が聾啞。娘のために小西信八の助言を得て1920年私立日本聾話学校を設立し、口話法を導入した。次男ライシャワー駐日米国大使の父は初代校長。（書籍紹介 齋木昭孝・三重県）



絶版 「映画に生きた古海卓二の追憶」

没後1年の時に聾の長男・古海巨が父古海卓二遺稿集を編纂・発行した。巨は『聴力障害新聞』編集長等を歴任した編集者であった。古海卓二(1894.3.3～1961.4.10)は日本の劇作家、映画監督、小説家。オペラ作劇により「浅草オペラ」、横浜の大正活動映画で活動の後に舞台を京都に移し、映画監督として活躍した。発行部数わずか500部。1962年5月発行（書籍紹介 齋木昭孝・三重県）



絶版 音なき白球を追って「障害児の栄光」

夢にまでみた県大会優勝—だが高野連の内規はろう児たちの北陸地区大会への道を冷たく拒絶した驚き、怒り、絶望。障害者であるがゆえにうけたこの差別に全国から寄せられた抗議と激励の波。やがて情勢は一転、特別措置によって全国大会への出場がきまった。…そして、涙あふれる感激の入場行進。出版社：風媒社 1975年5月発行（書籍紹介 齋木昭孝・三重県）



新聞 切り抜き

故郷の誇る「点字の父」石川倉次伝を 自費出版

◇長南の元教師、生誕150年に

日本点字の創始者・石川倉次(1859～1944年)の伝記「石川倉次物語—日本点字の創始者—」を、千葉県長南町小沢の元小学校教師永嶋まつ子さん(61)が自費出版した。昨年は同町で青少年期を過ごした石川の生誕150年、今年は日本点字採択から120年の節目。永嶋さんは「郷土の偉人について知るきっかけになれば」と話している。

石川は1859年、静岡県浜松市で浜松藩士の子として生まれ、69年、上総国(現在の市原市、長南町など)に移り住んだ。86年、東京盲啞学校(現在の筑波大付属視覚特別支援学校)で教鞭を執る中で、すでに欧米で広まっていたレイ・ブライユ(仏)の点字と出会った。

ブライユの点字は、アルファベットと数字を六つの点で表したものを、これを日本の仮名に置き換える研究を始め、試行錯誤の末、90年11月1日、子音と母音を組み合わせる6点式の日本点字を生み出した。この日は「点字の日」として現在も残り、石川は「日本点字の父」と呼ばれている。

永嶋さんが石川に関心を持ったのは、夫の遺品整理がきっかけ。4年前に亡くなった小学校教師の夫仁一さんは、子どもたちに地域の歴史を話すのが好きで、郷土史に関する膨大な資料を集めていた。永嶋さんは「夫は郷土について本を書きた

かったのでは」と考え、自ら郷土史本を出版。その過程で石川の人生に強くひかれ、伝記を書こうと決意した。

石川が生まれた浜松市の図書館にも取材するなどした永嶋さんだが、16～18歳頃に長南町で一人で暮らし、近くの水沼小学校で教員をしながら勉学に励んでいた当時の家は、資料がなく場所が特定できないでいた。ところが伝記を書こうと思い立った2008年7月、買い物途中で偶然話した付近の男性から、「石川のものらしい書が家に伝わっている」と聞かされた。

その書は「吉川金造」と署名がある戯画。吉川は聴覚障害者で日本初の教員となった石川の教え子だった。当時は、生徒の書を世話になった関係者に贈る習慣があったことから、永嶋さんは「石川が若い頃にお世話になった家に、後にお礼の気持ちを込めて贈ったのでは」と推測する。

住んでいた家の所在地は突き止められなかったが、石川はちょうどこの頃、母や弟を亡くしている。「石川にとって一番苦しい時期だったはず。後に点字を開発するという粘り強さは、ここで醸成されたのではないのでしょうか」と永嶋さんは思いをはせる。

A4判53ページ。3000部を印刷し、県内の小学校や図書館に寄贈。残る約800部は、希望者に1冊500円で頒布する。問い合わせは、永嶋さん(0475・46・0749)まで。

2010年1月18日 読売新聞地方版引用

編集後記



■桜が散り、タケノコが生え始める頃になりました。会報28号をお届けします。特に7月に行われる「聾史セミナー」があります。その案内を載せましたので、皆様のご参加と再会をお待ちします。歴史セミナーは過去に何回か開きましたが、2004年の群馬県伊香保温泉以来です。会場はゆかりを求めて、全日本ろうあ連盟が創立した同じ「木暮館」(現在はホテル木暮)でした。

■「聾史会報」への意見や聾史関連情報(教育・生活・文化等々に関わること)がありましたら、

広報部までお寄せください。

次号原稿〆切は6月1日。

■次号(29号)発行は平成22年(2010)7月15日

■投稿先

渡辺徳浩 FAX (06) 6681-8685

Eメール naruhiro14@yahoo.co.jp

■投稿先・制作 中根清隆

Eメール k5271@sun-inet.or.jp

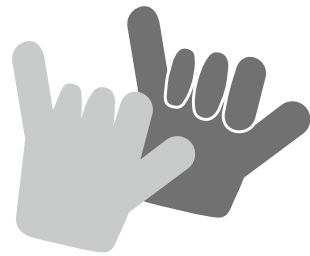
■印刷・発送 内田博幸

■日本聾史学会への問い合わせ

事務局長 亀田明美 FAX (082) 271-2403

Eメール jakemi37@yahoo.co.jp

■日本聾史学会HP <http://www.jadh.jp/>



日本考古学会

考古会報 第28号

平成22年(2010)4月15日発行

発行人／桜井 強

編集人／中根清隆

印刷発送／内田博幸

※無断で複写コピー・転写を禁止します。